産休サンキュープロジェクト・ニュースレター

2021年４月号

Vol. 16

アフリカへの支援のあかし

日本赤十字社（日赤）のロゴが入った新型コロナ啓発グッズ（写真下）。©国際赤十字・赤新月社連盟（以下、連盟）

子ども達に配布される衛生パック（写真上）。中身はタオル、石鹸、歯ブラシセット、生理用品、マスクなど。©連盟

今なお収束の目途が立たない新型コロナウイルス感染症（以下、新型コロナ）。本プロジェクトで支援を行うアフリカ6カ国でも引き続きその影響が及ぶ中、現地では活動を見直し、地域に根ざした方法で予防対策を実施しています。

今号ではまず、アフリカ南部にある小国エスワティニから工夫を凝らした対応策をご紹介します。

エスワティニでは昨年３月の緊急事態宣言以降、新型コロナの第１波・第２波に見舞われ、陽性者数17,000人、死者数600人を超えています（2021年４月時点）。政府による移動制限措置は食糧供給に打撃を与え、世帯の生活状況や子ども達の栄養失調状態の悪化などの問題が生じています。

そんな中、バファラリ・エスワティニ赤十字社（以下、エスワティニ赤）は政府に協力し、特にボランティアによる世帯訪問や印刷物を活用した住民への予防啓発活動、子ども達や貧困世帯への物資の支給を通じた支援に力を入れています。

ボランティアは、新型コロナの概要や、手洗い・マスクの着用などの感染予防策、母子への配慮などについて研修を受けた後、実際に近隣世帯を訪問し新型コロナの予防策のほか、HIV感染症や非感染性疾患、健康管理に関する知識を普及します。また啓発用グッズに新型コロナの予防法などを印刷し、周辺の世帯や学校、集会所などに配布しています。

ラジオやテレビ等のメディアを通じた情報が乏しい農村地域で正確な情報を届けるには、このような地道な取り組みが効果的なのです。

新型コロナ対策について学ぶボランティア©連盟

その後、世帯訪問を通じて予防策を伝達するボランティア。貧困世帯には食糧配給も行う。©連盟

～子ども達への物資支援～

エスワティニ赤が運営し、日赤が国際赤十字・赤新月社連盟（以下、連盟）を通じて、長きにわたり支援を行っているシレレ診療所。HIV感染症の治療を受ける70人の子ども達に対して食糧パックや衛生用品、通学バッグ、文具などの配給もそこで行われています。

HIV感染症の治療には、継続的な治療薬の服用と食事や衛生面でのケアが不可欠です。これらの物資の支給は、新型コロナの影響で世帯の家計状況がひっ迫する中で、子ども達の治療を継続するために不可欠であり、また子ども達が楽しみながら治療を行い、自信を取り戻すための要でもあるのです。

シレレ診療所内にて順番に並んで物資の支給を受け取る子ども達。©連盟

「産休サンキュープロジェクト」とは

アフリカ地域では、未だ多くの子ども達が、病気や栄養不足により幼くして命を落としています。その率は世界平均の約２倍。また衛生設備の不足や感染症の拡大など様々な課題に直面しているのです。未来を担う子ども達が心身ともに健康に成長するため、継続的な支援が求められています。

新しい命の誕生は、家族にとっても、社会にとっても、大きな喜びです。出産をきっかけに家族と企業が一緒になって、アフリカの子どもやお母さんのための支援に参加してみませんか。本プロジェクトは産休・育休の取得促進を応援しながら、アフリカ地域での保健課題を改善する様々な支援を行っています。

毎年４月・11月に発行されるニュースレターでは、ご支援いただいている事業の報告のほか、現地の最新ニュースやとっておきの話をご紹介していきます。

社内外のプロジェクト支援者への配布や、社内報等への掲載、あるいは貴社・貴団体のCSR活動報告等にご活用ください。

2020年下半期ハイライト

皆さまからの温かなご寄付は、遥か遠いアフリカの地で、様々な活動の実現に繋がっています。ここではその一部、ブルンジとナミビアから、社会的に最も弱い立場にある人々への支援と今後の課題をご報告します。

ナミビアのキッズクラブの子ども達©連盟

障がいを持つ人々から話を聞く
ブルンジ赤ボランティア©連盟

ブルンジ ～誰ひとり取り残さない～

新型コロナ以前、ブルンジでは保健や防災に関するアニメ映画（モバイルシネマ）を上映して、疫病や災害を未然に防ぐ教育を行っていました。しかし、新型コロナの感染拡大で不特定多数の人が集まる集会が制限されたため、ブルンジ赤十字社（以下、ブルンジ赤）が導入したのがフォーカスグループディスカッション（FGD）という取り組みです。2020年度は281回のFGDが実施され、参加者は20,081人に及びました。

対象となるのは、アルビノやバツワと呼ばれる人々、障がいを持つ人々など、ブルンジで社会的に差別をされてきたコミュニティ。ボランティアによる訪問を通じて、新型コロナに関する情報や予防策を伝えたり、彼らが直面する課題や意見を聞き、活動に反映することで、ブルンジ国民の一員としての誇りと自信の醸成に繋がっています。

彼らからは、差別なくいかなる人々にも寄り添おうとするブルンジ赤への感謝の声が挙がっています。ブルンジ赤は2021年度も、より多くの人々の声を聞くために対象地域を拡げ、FGDの取り組みを継続していく予定です。

ナミビア ～すべては子ども達の未来のために～

日赤の支援を受け、ナミビア赤十字社（以下、ナミビア赤）が行っている活動のひとつに、HIV感染症で親を失った孤児や貧困世帯の子ども達（Orphaned and Vulnerable Children: OVC)への物質的・心理的支援があります。対象となるのは、6歳から17歳の就学期にある子ども達で、彼らの置かれた立場や環境のために退学を余儀なくされた子どもも含まれます。2020年度にナミビア赤は合計150人のOVCへの支援を実施しました。

①

支援の柱となるのが、キッズクラブと呼ばれる学童保育の運営です。毎週火曜日と水曜日の放課後に子ども達が集まり、年齢と学年に応じて、宿題を手伝ってもらったりライフスキル、塗り絵やお絵描きのセッションに参加したり、最後には軽食が提供されます。宿題の支援と食事の提供は、子ども達のやる気を維持し学校での成績の向上に繋がっているほか、塗り絵やお絵描きを通じて感情をはき出し子ども達が自信を取り戻すきっかけとなり、心理的な支援となっています。その他にも、マットレスや毛布、衛生用品などの物資の支給も行い、子ども達の自宅での生活環境の改善を目指しています。

②

また、特に重度な貧困世帯や新型コロナの影響で経済的に困窮する世帯の子ども達に対しては、安心して眠ることができる住まいの建設や、食糧パックの配付を行っています。しかし、支援が必要なすべての子ども達に手を差し伸べられるというわけではありません。150人のOVCの中には、ビニールで周りを囲っただけの地べたで寝ている子ども達がいます。また、新型コロナの影響などで支援が必要な子どもの数が増加する一方で、物資や食事の支給は本来の150人のOVCに限られ、それ以外の子ども達に行き渡る余裕はないのです。貧困と空腹に耐えながら、他の子ども達が物資や食事を受けるのをじっと見つめる支援を受けられない子ども達。それらの子ども達にも支援が行き渡るよう、本プロジェクトを通じて支援の拡充を目指しています。

（上から右回りに）写真①キッズクラブで宿題をする様子。写真②劣悪な環境に住む子ども達のために、安全で衛生的な住まいが建設された。写真③毛布や衛生用品を受けとる子ども達。写真④キッズクラブのセッション後は子ども達全員に軽食がふるまわれる。©連盟

④

③

©IFRC ©IFRC

ナミビアからの「ありがとう！」

OVC支援プログラムで支援を受ける子ども達から、日赤に届いたありがとうのメッセージをご紹介します。

ポーリナ　スゼ
Paulina Suzuさん(14才)

私は赤ちゃんの時に両親を失い孤児になりました。今世話をしてくれている夫婦には職がなく、私は学校を辞め食べ物にも困窮していました。

そんな時、ナミビア赤のボランティアによる世帯訪問をきっかけに、支援が受けられるようになって学校にも行けるようになりました。

私にマットレスや制服、衛生用品など必要なものを提供してくれるナミビア赤と日赤に感謝しています。定期的な世帯訪問を受け、私の話に耳を傾けてくれる人がいると感じられ、私や私の将来を気にかけてくれる人がいることが心の支えとなり希望が湧いてきます。　今は医師になるという夢に向かって前進しています。

ラジャ　アルウェンド
Lagja Alwendoさん(8才)

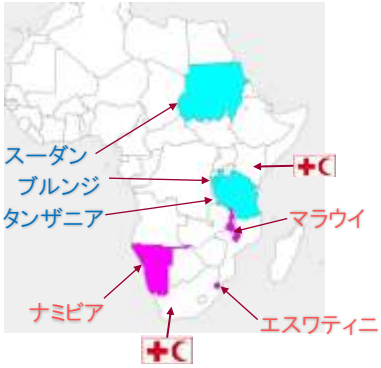
私には父がいますが、職がなく、母に会ったことはありません。
かつてはつらい状況でした。

日赤がナミビア赤を通じて支援をするプログラムで、支援を受けられることになったのは本当に幸運でした。マットレスやブランケット、石鹸やクリームの入った衛生用品を受け取っています。

将来は学校の先生になって、ナミビアの発展のため次の世代の教育に貢献したいです。

お知らせ　2021年の支援対象国を紹介します

東アフリカ地域保健強化事業と南部アフリカ地域感染症対策事業の支援対象国の見直しを行い、新たにスーダンを支援することになりました。（以前支援していたルワンダは、日赤の二国間事業を通じて支援を継続します。）これら2つの事業を支援している産休サンキュープロジェクトの支援対象国は、引き続き6カ国となります。2021年度における各事業は、2021年4月に開始し2022年3月に終了予定です。



＜2021年度支援する国と活動＞

	支援対象国	活動内容
東アフリカ	ブルンジ	ラジオ放送・フォーカスグループディスカッションを通じた保健・防災の啓発活動
	タンザニア	地域啓発活動に関する研修の実施、職員・ボランティアの育成を通じた地域活動の強化、地域からのフィードバック体制の強化
	スーダン　NEW!	地域啓発活動に関する研修の実施、支部職員・ボランティアの育成を通じた地域活動の強化
	国際赤十字・赤新月社連盟 東アフリカ地域事務所	上記３カ国への支援にかかる事業管理
南部アフリカ	ナミビア	キッズクラブ（学童保育）の運営、簡易住居の管理、 就学支援、衛生用品や毛布の配付、家庭菜園指導 HIV感染症陽性者及び貧困家庭に対する世帯訪問と訪問看護
	エスワティニ	診療所の運営、HIV感染症・結核の予防啓発・検査・治療、 HIV感染症・結核陽性者に対する食糧支援、　世帯訪問
	マラウイ	啓発イベントの実施、ユースグループの設立、保育所運営、 就学支援、世帯訪問
	国際赤十字・赤新月社連盟 南部アフリカ地域事務所	上記３カ国への支援にかかる事業管理

ご支援有難うございます

賛同企業　5社　（2021年4月現在）

- 住友商事株式会社
- SCSK株式会社
- ヤフー株式会社
- 木村情報技術株式会社
- 株式会社ローズマロウズ

（賛同開始順）

賛同企業を募集中です。多くの企業の皆さまのご協力お待ちしております。

日赤ルワンダ代表部首席代表の吉田拓がお届けします！

あばばいぇい通信

ルワンダの悲劇から26年

ラジオを通した受益地域の関わりと自立

ルワンダの農村にてラジオを聞く住民とボランティア©ルワンダ赤十字社

吉田拓（よしだたく）

日赤ルワンダ代表部首席代表としてキガリに赴任。千葉県出身。ラジオ波のように南米、アジア、アフリカと、世界をかけ回って仕事をしている。電波は、そのまま帰らず永遠に宇宙空間を飛び続けると知って戦慄する44歳。

この4月で、ルワンダでの内戦（ジェノサイド）が発生してから26年が経ちました。1994年4月7日から約100日間で、数十万人から百万人とも言われる人々の命が奪われたと言われています。この際、人々に暴力行為を扇動する放送がラジオで流され、放送に接した人々が、自分たちの地域や友人、隣人との関係を守るための判断ができなくなり、殺りくに加担したことがわかっています。人々を繋ぎ、より良い世界を作ることに貢献すべきラジオ情報技術が、社会を分断し、破壊することに利用された悲しい事例です。とはいえ、今でもルワンダ人の主な情報入手源はラジオで、ルワンダ政府当局の調査によると、国民の8割以上がラジオを通して情報を得ています。

ルワンダ国民がラジオを信頼する一方で、ラジオを通した情報発信は一方通行になりがちです。草の根の人々が困っていること、不信感を持っていること、知りたいことに耳を傾け、人々を分断するような噂を察知し、正確な情報を提供して平和な社会を築くことはラジオの大切な使命です。一方で、遠隔地の農村では、所得が低く携帯電話を持つことができず、物理的にラジオ局に物言うことができない、または華やかなイメージの都市部のラジオ局に意見することに気後れしてしまう人々がたくさんいます。声をあげられない視聴者の声を聞き、本当に必要な情報を伝えるにはどうすれば良いのか？難しい問題ですが、赤十字は画期的な工夫をして解決にあたっています 。

日赤は、国際赤十字と一緒に、ルワンダのほか、ブルンジ、タンザニア で、住民の声に耳を傾け、ニーズを尊重した情報を発信しています。現地の赤十字社は、人々が不安に思っていること、誤解していること、不信感を持っていることを調べ、臨機応変に発信する情報を変えています。地域住民の声を聞き、応えることは、言うは易しで大変手間がかかりますが、世界の隅々でボランティアが活躍している赤十字だからこそやるべきこと、としているこだわりの方針です。これは過去の人道支援の多くの受益者から、“ニーズを考えてもらえなかった、支援を受ける権利を知らされていなかった、支援に満足していない”、という声が挙がったことを反省し、受益者が主体的にニーズを決めることを尊重するという「受益地域の関わりと意思決定（コミュニティ・エンゲージメント・アンド・アカウンタビリティ、CEA）」という支援方針を全世界で推進しているという背景があります。

ラジオに話を戻すと、現地ボランティアを通して集めた現地住民の声は、国際赤十字が取り集め、対応を決めて、日赤に共有します。最近の話題はもっぱら新型コロナのワクチンで、ワクチンは効かない、悪影響がある、欧米諸国がワクチンを作って貧しい国に売って儲けようとしている、などの噂や不安が多く聞かれています。赤十字は、ラジオやボランティアを通して正しい情報を広められるように、噂への応答集やラジオが正確な情報を伝えられるように資料集を作り、現場で働くボランティアをサポートしています。不安、不信、憎悪を煽ることにラジオが使われた悲劇から四半世紀以上、日赤は、皆様のご寄付を通して、アフリカの人々が正確な情報をもとに、お互いが助け合えるような社会を実現するためにお手伝いしています。

※あばばいえい（Ababyeyi）とはキニアルワンダ語で両親という意味です。

※日赤とルワンダ赤十字社との二国間事業の開始を受け、ルワンダは2021年度から本プロジェクトの支援対象国ではなくなります。 とはいえ、アフリカ担当の吉田首席代表からの読者の皆さまへの報告は今後も続きます！全国のお父さんお母さんの中で、アフリカのあばばいえいについて聞いてみたことがありましたら、ぜひお寄せください。ご連絡は下記担当まで。

■産休サンキュープロジェクトに関するご意見・ご要望をお寄せください。

【お問い合わせ】　日本赤十字社　国際部　開発協力課　産休サンキュープロジェクト担当

電話：03-3437-7089　　Eメール：sankyuthankyou@jrc.or.jp

特にニュースレターの内容については、どのような情報がお知りになりたいか、素朴な疑問からご感想まで、皆様の声をお待ちしています。

■個人の方でも、Yahooネット募金を通じてご寄付頂くことができます。

日赤　産休サンキュー Yahoo募金　検　索